

新病院長に聴く

第 7 回 小郡第一総合病院長 藤井裕之先生

と き 平成 29 年 5 月 30 日 (火)
ところ 小郡第一総合病院 院長室

[聞き手：広報委員 長谷川 奈津江]



長谷川委員 平成 26 年度から始めました県医師会報の「新病院長に聴く」として、昨年 4 月に小郡第一総合病院の病院長に就任されました藤井裕之先生にお話を伺いたと思います。ちょっと遅くなってしまいましたが、病院長ご就任おめでとうございます。院長職だけではなく現役の医師としてのお仕事も続行されているとのこと、さぞご多忙のことと存じますが、いかがでしょうか。

藤井病院長 当院は前院長の時から、院長が普通に働くというのがカルチャーになっており、院長になってからも手術件数、外来の件数も全く変わっておりませんので、そういう意味では若干忙しくなっています。

長谷川委員 今までも忙しかったのに、そこに院長の職務もオンされ大変な激務ですね。

藤井病院長 唯一変わったのは、受け持ち患者さんを整形外科の他の先生と一緒に担当させてもらっていることでしょうか。日常的な業務の時間が少し減ったので、なんとか時間のやりくりをしています。

長谷川委員 そのような中で本日はお時間を頂いておりますので、いいインタビューになるよう努

めます。

最初に小郡第一総合病院のご紹介をお願いいたします。

藤井病院長 山口県の農業会が現在地に病院を建設することを計画し、昭和 23 年 6 月に 60 床をもつ第一病院が開設されましたが、8 月に県農業会は解散し、当院は他の病院とともに厚生連に移管されました。その後、増床と小規模の増改築を繰り返し、昭和 54 年 9 月に全面改築工事に着工、昭和 55 年 8 月に完成しました。昭和 59 年には総合病院に認定され小郡第一総合病院と再び改称し、平成 2 年には現在と同様の 182 床に増床して、現在に至っております。当院は山口市の二次救急を担う 3 病院の一つとして地域の急性期医療を担当しているという現状があり、基本方針である「患者本位の治療」「高度医療の推進」「チーム医療の実践」「地域との連携推進」の実践をスローガンに医師、看護師、コメディカルを始めとする全職員の人材育成を積極的に行っております。

28 年度の患者数は外来が 119,929 人、入院が 59,710 人で、本年 4 月現在の医師数は 28 名、職員数は 392 名、病床数は 182 床です。診療科目では、昨年の秋から脳神経外科の先生の常勤が復活しました。また、今春から呼吸器内科の先生が 1 名、来られました。

長谷川委員 脳神経外科と呼吸器科があると患者さんは助かります。

藤井病院長 救急患者を受け入れていく上では、脳神経外科の先生がいるのといないのとでは全然違います。残念なのは産婦人科が非常勤になってしまったことです。

長谷川委員 4つのセンター業務があり、先生ご自身も人工関節センターを開設されているとお聞きしておりますが、これは普通の専門外来とは違うのでしょうか。

藤井病院長 専門外来は一般的に一つの科の中にあるケースが多いと思いますが、センターは科を超えた一つの治療グループ、専門家集団というような意味合いがあります。例えば日帰り手術センターは単科ではなく、複数科で特化したチームを作ってやりますし、人工関節センターも整形外科だけではなく、他の科を巻き込んで専門治療グループを作っていくという考え方です。

長谷川委員 このぐらいの規模の病院で日帰り手術センターというのは珍しいような気がします。先生のご専門である人工関節センターでは、具体的にはどのような疾患を扱われるのですか。

藤井病院長 主に膝関節と股関節の人工関節を対象にしておりますので、ほとんどの方は変形性関節症とか関節リウマチといった疾患になります。

長谷川委員 膝関節や股関節の病気というと、女性の病気のように感じますが、やはり女性の患者さんの方が多いですか。

藤井病院長 70～80%が女性ですね。男性と女性とでは平均寿命が違って、女性の方が長生きされることも影響していると思います。

長谷川委員 次に病診連携について教えていただけますか。

藤井病院長 山口市の二次救急を担っている3病院の中で吉南地区（旧小郡地区）にあるには当院だけなので、地元に着した形ということで山口南、旧小郡地区の診療所の先生方と密な関係を築いていきたいと考えております。

長谷川委員 老人保健施設もありますね。

藤井病院長 「介護老人保健施設みのり苑」が隣にあり、入所定員50名となっております。病院と同じ敷地内にあります。

長谷川委員 病院の隣にあると患者さんは安心でしょう。敢えて病院の一番の特徴を言われるとしたら何でしょうか。

藤井病院長 182床というコンパクトなサイズですが、28名の常勤医師がいて、年間2,000～2,500件の手術を行うアクティブな病院です。中でも整形外科には常勤医が9名おり、関節外科、手外科、脊椎外科、外傷と、すべての分野で専門的治療が行えることが特徴です。また、病院として医療の進歩に貢献したいという理念を掲げ、臨床研究や学会活動、論文執筆などの情報発信にも力を入れています。

長谷川委員 非常に活動的で今なお進化されている病院ですね。

藤井病院長 アカデミックでオープンな病院を目指しており、15年以上にわたって海外からの研修生を受け入れています。常に1～2名は在籍していて、現在はエジプトとシンガポールから1名ずつ来ています。国内からの研修生も不定期ですが受け入れている、いろいろと情報交換ができて刺激になります。

長谷川委員 その研修生は主にどちらで何を研修されるのですか。

藤井病院長 今は整形外科内で手外科の研修を中心にやっております。

長谷川委員 整形外科の先生が 9 名とは充実していますね。

藤井病院長 研修で来ている先生も含めてということにはなりますが。

長谷川委員 先生はいつ頃から在籍されていますか。

藤井病院長 最初に来たのは 1999 年で、一旦、2 年あまり外に出ていたんですが、2004 年にまた帰って来て今に至っています。

長谷川委員 毎日忙しく院内を移動されていると思いますが、院内で好きな場所はございますか。

藤井病院長 気に入っている場所は、人工関節センターがある東棟のデイルームです。そこは、日当たりの良い広いスペースで、ほとんどの患者さんたちは、希望して一緒に食事をされています。同じ手術の先輩、後輩と言いますか、先に手術した方が後から手術される方にいろいろ教えたりされて、素敵な患者間コミュニケーションが発生しています。病気の性質上ということもあるんですが、人工関節は QOL 改善の手術なので、ほとんどの方が良くなります。ですから、笑い声の溢れる食事風景が日々繰り返されていて、私たちに活力を与えてくれる空間になっています。

長谷川委員 特に整形の先生からすれば、患者さんがそこまで移動されて箸やスプーンを使ってのお食事の様子をご覧になると、手術の成果や患者さんの改善が実感でき喜ばしいことでしょう。

藤井病院長 患者さん同士がコミュニケーションを取って、入院生活自体の QOL と言いますかアメニティが上がってくることが楽しいですね。中には同じ時期に入院された患者さんたちで集まって同窓会のようなことをされている方も居られます。

長谷川委員 整形の患者さんはお元気な方が多そ

うですよ。看護師さんや先生に尋ねにくいことなどを聴いたり教えてもらったりできていいですね。

藤井病院長 センター化の一つのメリットだと思っています。

長谷川委員 次に、若手医師に占める女性の割合が増えてきていることから女性医師の働きやすい環境を作るために皆さん、いろいろ尽力されておりますが、先生はどのようなことをお考えですか。

藤井病院長 女性医師は本当に増えており、まだまだ活用できる人材がいてと思っています。当院では 2008 年から院内保育園「さくらんぼ保育園」を開設しています。駐車場のすぐ側にあるので非常に便利で、利用者もどんどん増えていて、なかなか体制が追いつかないような現状になっています。少しでも働きやすい環境になればと思います。残念ながら女性医師で利用されている方はあまり居りませんが、女性職員には非常に好評で、そういう環境を作っていくことが大事なかなと思っています。

長谷川委員 子育て中の女性には何よりのサポートです。育休明けや乳幼児の子育て中の女性医師に対する当直の免除などの配慮はされていますか。

藤井病院長 まだ、そんなに該当者が居ないので、必要に応じて紳士協定的な形で個別対応しています。

長谷川委員 人によって、その背景が違い、必要な支援もさまざまですから。

藤井病院長 家庭のサポートの厚さ等についても差があるので、なかなか一律にというのは難しいのが現状です。

長谷川委員 卒後研修についてはいかがですか。

藤井病院長 当院も研修病院になっていますが定員 2 名ということで、体制は整えているんですが、ここ数年はマッチングがなかなかうまくいっていません。今後、大きな病院にはない、少数だからできる内容の濃い研修であったり、当院の特徴は整形外科でもあるので、将来的に整形外科に行くということを決めている人、それから外国人が居ることから海外留学や英語でのディスカッションを早く経験したいという要望がある方にはとても面白い施設だと思うので、ぜひとも来ていただきたいと思います。

長谷川委員 自分がこうなりたいというビジョンをはっきり持っている若い先生には非常に魅力のある環境であると感じます。

藤井病院長 私もそう思うんですが、今の所、なかなか活用できていないのが少し残念です。

長谷川委員 次に新院長としての抱負をお聞かせ願います。

藤井病院長 この地域の急性期医療を支える中心的な役割をこれからも十分果たしていけるよう、今まで以上に病診連携に力を入れて密接な関係を構築し、少しでも地域のお役に立てるようと思っています。それと先程も申しましたが情報発信をする病院ということで、専門分野をもって突きつめていきたいという人たちを少しでもサポートできるよう、革新的なスピリットを持った先生がおられればできるだけサポートしていき、どの分野が伸びていくかはいろいろあると思いますが、頑張っていけそうなエリアがあればそこを伸ばしていくというフレキシブルな対応をしていきたいと思っています。

長谷川委員 ヤル気がある先生や必要のある専門分野があったら、これからも支援し充実させていくということですね。

藤井病院長 柔軟い対応、状況や必要に応じた対応をしていきたいと思っています。

長谷川委員 次に先生ご自身についてお伺いしたいと思います。

藤井病院長 出身は岡山県の井原市という所です。最近で言うなら、お笑いコンビの「千鳥」の一人が隣の笠岡市北木島の出身で、もう一人が井原市芳井町の出身です。

長谷川委員 桃や葡萄をたくさん食べて育ってこられたのですか。

藤井病院長 ありましたけど、高級な白桃とかではなく、近所で作っておられましたね。高校まで過ごして、山口大学に入りました。

長谷川委員 どういうきっかけで医師になろうと思われたのでしょうか。

藤井病院長 医師になろうと思ったのは高校 3 年の途中でした。ただ、今思えば中学の時に一度、体調を崩しまして、スポーツが好きで野球部に入ってたんですが、健康診断でひっかかってドクターストップとなり、スポーツ全般、マラソンや水泳が禁止となり、中学 3 年間、ほとんど運動ができませんでした。その間、凄く辛くて、自分の進路を考える際に、何か人を助ける仕事があったらと思ったのがきっかけかもしれません。

長谷川委員 今、山口県に残る学生さんが少なくて問題になっていますが、先生はどうして山口県に残られたのですか。

藤井病院長 山口県が好きだったんでしょうね。それと大学時代に会った人たちも好きだったんだと思います。部活動の先輩後輩も含めて、いい人にたくさん巡り会えてとてもよくしていただいたので山口県から離れられなくなったのだと思います。

長谷川委員 整形外科に進もうと思われたのは、いつごろですか。

藤井病院長 これもギリギリになってからでした。どの科も魅力的だったので、どこに行っても面白いだろうなどは思っていたんですが、当時、ラグビーをしていたので整形外科は非常に身近な科だったこともありますし、自分たちが経験してきたり診たりしてきた疾患をたくさん扱っているということで志したんだと思います。

長谷川委員 現在もシニアチーム「山惑^{やまわく}」のフォワードとして活躍なさっていますが、ラグビー以外にもご趣味はありますか。

藤井病院長 本を読むことが好きで分野を問いません。あとは、最近あまり弾いてませんが、ピアノを弾くことですかね。家には娘用のグランドピアノがあります。

長谷川委員 グランドピアノですか、それは凄いですね。先生にピアノは意外な感じですか。どんな曲がお好きですか。

藤井病院長 私のピアノの先生はビリー・ジョエルだったんですが、最近娘の先生のショパンを聴くことが多くなりました。

長谷川委員 若い時は彼女に弾いてあげたりされていたのでしょうか。では、座右の銘を教えてくださいませんか。

藤井病院長 敢えて言うなら「笛が鳴るまでプレーオン」です。これはラグビー用語ですが、二つの意味があります。ラグビーでは反則があってもレフリーはすぐに笛を吹かずにアドバンテージを見ます。ところが反則に気づいた選手は、しばしば自己判断をして力を抜いてプレーを止めてしまうのです。でも、実際はプレーが進行しているため、大きなチャンスになり得るのです。ピンチに見えて実はチャンスだったりすることもあるので、笛が鳴るまで気を抜かず頑張りという意味が一つ。もう一つは、これを人生にあてはめて、何が起るか、いつ終わるかのわからない人生を、最後まで放り出さずにしっかり生きようという意

味です。

長谷川委員 素晴らしいお言葉ですね。最後に若いドクターへのメッセージをお願いします。

藤井病院長 最近、ラグビー部の後輩の学生たちと話したりする機会に感じるのですが、周囲に気を遣い過ぎていて、失敗しないことを目指しているような印象を受けます。将来に対する不安は当然あるでしょうが、「僕でもちゃんとやれるでしょうか」なんて訊かれると驚いてしまいます。そういった場合、「もっと大口叩いてみたら」と答えるようにしています。できるかどうかはともかく、少なくとも若い人には無限の可能性があるので、ノーベル賞を取ったり、世界の第一人者になるかもしれないと思うんですね。だから、若者らしく「俺はてっぺん取ってやる」みたいなことを言ってもらいたいです。若い頃にはそのぐらいの迫力と大志を持って、あまり小さくまとまらないで欲しい、というのが私の希望です。

長谷川委員 本日は長時間にわたり、誠にありがとうございました。先生のこれからのご健勝と小郡第一総合病院がさらに発展されることを願ってインタビューを終わらせていただきます。

